

Title	総同盟五十年史刊行委員会『総同盟五十年史第一巻』
Sub Title	Fifty years of the Japanese federation of trade unions vol. I.
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1965
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.10 (1965. 10) ,p.130- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19651015-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

総同盟五十年史刊行委員会

『総同盟五十年史 第一巻』

総同盟（日本労働総同盟）の歴史をたどつていくと大正元年（一九一二年）八月一日に友愛会という名称で、一五名によつて旗上げされた時期にまでさかのぼることができる。大正元年といえば、いわゆる社会運動の暗い谷間の時代である。社会主義運動も労働組合運動も窒息させられていた時期である。状態はきわめて不利なときであつたから、友愛会は自ら労働組合であるとは宣言せず、労働者がい集りあい助けあう親睦団体、個人の成長、技術の向上、社会的地位の改善をはかる団体であるといふことで出発した。

友愛会が、「大日本労働総同盟友愛会」と改称したのは大正八年（一九一九年）八月三十日から九月一日にかけておこなわれた第七周年全国大会においてであつた。この時採択された宣言は「人間は、その本然に於て自由である。故に、我等労働者は、如斯宣言す。労働者は人格者である。彼はただ賃銀相場によつて売買せしむ可きものではない」という文字ではじまつていた。この冒頭の文字を見ただけでも友愛会はここで大きく転換し、親睦団体の装いからはつきりと労働組合の看板にぬりかえたことがわかる。

翌大正九年（一九二〇年）の大会では大日本労働総同盟友愛会は「日本労働総同盟友愛会」と改称し、さらに大正一〇年（一九二一

年)の大会では「友愛会」を削除して「日本労働総同盟」と唱うることになった。この名称の変化は、労働組合としての自覚のたかまりと、過去のあいまいな姿勢から脱却しようとする努力のあらわれに外ならない。友愛会はその名称をかえるごとに労働組合としての自覚をたかめていったし、運動も活潑になっていった。もつとも大正一四年(一九二五年)には組織が、大きく分裂し左派は共產主義系の日本労働組合評議会にわかれていくという不幸なこともあつた。しかしながら、総同盟は戦前におけるわが国労働運動の本流であることにはかわりはなかつた。

昭和十五年(一九四〇年)、全労働団体の解消という舞台のなかで総同盟も解散のやむなきにいたつたが、戦後いち早く再建され、それは昨年(一九六四年)十一月の「同盟(全日本労働総同盟)への発展的解消までつづいた。この五十有二年にわたる総同盟の歴史は、その長さにおいて他の組合のとうてい及ばぬものであることはもちろんのことであり、戦前に総同盟がはたした効果は他の組合の追従を許さぬところであつた。

総同盟はその友愛会としての出発のときからそうであつたのだが、自ら好んで平地に乱を起し、破壊的なストライキをするという組合ではなかつた。総同盟のこの姿勢は、労働者の利益の向上のためにどれだけのことをなしたかということよりも、どの位はげしいストライキをやつたかということの方が歴史評価の尺度になつていゝるわが国においては、軽視されるか抹殺されるかであつた。珍らしく取り上げられるときがあつても、はげしいストライキをして組合

をつぶし、その結果労働者は職を失つて巷にさまようようになっても英雄的なたたかいと評価されるわが国においては総同盟の現実主義は侮蔑の対称となるだけであつた。

総同盟が研究対象に取り上げられるようになってまだ二、三年にもならぬが、その研究者も左翼運動の研究者にくらべてまことに微々たるものである。こうした状況の中で、本書は大正年間だけの総同盟の歴史をまとめたものであるが、本文八九〇頁、資料三〇〇余頁、年表一一〇余頁、計一、三〇〇余頁という大書として刊行されたことは、総同盟の存在を高く評価する同学の徒にとつて誠に感激的なことであつた。

人によつては部分的に追加補充したいところもあろうが、友愛会・総同盟の大正年間の歩みは全面的にカバーされ、押えるべきところは押えているといえる。その点ではきわめて詳細な記述となつている。

しかしながら事象の起生出没を年表的に詳細にいくら追つてみたところでそれが歴史といえるかどうか問題である。いかに秘密な年表でもつくりうと思えばつくれないことはないが、それによつて歴史がつかめるかどうか。本書を通して痛切に感じられたことはこのことである。それは具体的にいえばつぎのようなことである。

大正元年八月一日に一五名で出発した友愛会はその年の末には二六〇余名になつた。それが大正二年七月二〇日には一、三二六名になり、大正三年一月五日には二、二八二名と発表された。こうした会員の数字とか支部の発展状況とか、あるいは大会の決議や宣言が

事こまかに、この面では申し分なく書かれている。人間の足で探し、眼でとらえられるものができるかぎりとりえようとしていているが、肝心なことが一つぬけているようである。

友愛会・総同盟はあの窒息時代、冬の時代に産声をあげたのだが、それがなぜ弾圧解散されず発展したのか、という説明がないことである。冬の時代とはいえ労働組合は統計にはつきりしているように友愛会以外に何十となく生まれたが、大きく成長し発展したのは、じつに友愛会・総同盟だけであつた。その秘密はいつたいなんであるのか。この点について本書はまとまつた解釈をしていない。従来の左翼文献だと友愛会・総同盟は資本家の走狗であり、権力階級の手先であつたといつて、そのことがこの団体だけを生き残らせたとするが、もとよりこれは学問に値しない詭弁にすぎない。折角、

総同盟史を執筆する以上、研究者はなにをいってもこの問題をはつきりさせなくてはならない。しかるにここではその肝心な点の究明が不十分である。ここに書かれている論法にしたがえば、小人数でグループさえつくればやがてそれは何百人となり何千、何万と発展していつてよいはずである。じじつは友愛会だけがそうなつて、それ以外の幾十というグループはそうならなかつたのである。なぜだるうか。友愛会が生まれ、成長した時代は、上からの指導により組合がつくられ育てられた戦後とは事情が違ふのであるから、「なぜ友愛会だけが成長発展したか」という大きな一章が当然のことながら書かれなくてはならない。この必要不可欠の章を欠くということ

は、本書を執筆するにあたり、執筆者達が問題の核心を十分に把握

しておらなかつた、つまり問題意識が稀薄であつたということを示すものであらう。

鈴木文治以下一五名が集つて友愛会をつくつたら無為にしているも総同盟に発展したわけではない。もちろんそこには発展への努力があつたわけだが、大きくならうという努力は友愛会だけでなくどの組合でもすることである。単なる努力とは異つたものがそこにはなくてはならないが、それについて注意せず、究明していかないということは、友愛会・総同盟の本質をなんら知つてはおらないということになりはしないだろうか。友愛会・総同盟の本質を知つていないといふことは、この時代とそのなかの労働運動といふものの本質を十分に把握しておらないということにもなると思ふが、そのことは別の点でも証明できる。

友愛会・総同盟といへば鈴木文治、松岡駒吉、賀川豊彦、西尾末広といつた大幹部級の人物論が運動との関係においてとらえられていなくてはならないがこの点が不十分である。しかしながら、もつと大切なことは運動の最前線で采配をふるう支部長クラスの人物論であり、これをぬきにしてはこの時代の運動の本質を掴むことができぬのである。たとえば横浜海員支部は大正四年(一九一五年)に設立されたが、この支部の発展はまことに爆発的であつて他にその例をみないほどであつた。これは後に日本海員組合に独立したのであるが、この支部の責任者は浜田国太郎であつた。本書では、この組織は「毎月、すくないときで四、五十名、多いときで二百名以上」(二五〇頁)増加したことはなるほど書かれているし、鈴木文治の著

書から引用して浜田国太郎なる人物を十行位紹介はしている。しかしこの二つのファクターの間にとどのような関係があつて爆発的組織の発展となつたのかその点の究明が皆目なされておられない。爆発的

発展のすさまじさは誰にでも「なぜだろうか」という疑問をいだかせずにはいないはずであるが、この執筆者たちはその疑問をいだいていない。大正中期の浜田国太郎は、われわれが想像しがちな近代的で民主的な人物ではなく、むしろその逆であつた。そのことは當時の友愛会の資料をみてもでている。非近代的で、非民主的な人間が、本来近代的であるべき労働組合のすばらしいオルガナイザーであつたということは当然注意されなくてはならない。支部長クラスで、実力のあり、力のあつた者は必ずしも合理的な精神の持主ではなく、力(腕力)により、身体を文字通りはつていた人間であつた。よりはつきりいえば無頼の徒めいたところもなく、第一線のリーダーになれなかつたことは、現在なお健在なこの時代の労働運動家が等しく述懐してくれるところである。これは、総同盟より評議会が別れ、労働運動の実践面において左右の抗争がはげしくなつた時期に、自分たちの組織を守り発展させることができた者は冷静な理論家、合理的な精神の持主ではなかつたこととも共通している。このことは人類解放の労働運動として神聖視する者にとつては耐えがたいことであるが、事実はなんとしても動かすことができないのである。今日から見るとたとえ正視するに耐えない人物であろうと、その人物を欠いては運動の維持も発展もなかつたのである。これはなにも総同盟に限つたことではなく事情は評議会においても全く同様で

ある。運動はこうした人物を要請したのである。それが大正、昭和戦前の時代であつた。

本書には、友愛会・総同盟で起つたことはなんでもつめこんで書いてある。しかし運動を展開し、推し進める主体についての究明を全く欠いている。巨大なる仏像を折角つくつたが、魂がこもつていないのである。(五、〇〇〇円)

(中村 勝範)